

Computex 2016 レポート

今年から併設となったベンチャーイベント/ InnoVEX2016 に注目

台北市コンピューター協会東京事務所 駐日代表 吉村 章

■ Computex2016 開催概要と InnoVEX 2016

「交流」8月号に続き、Computex2016 をレポートする。Computex2016 は5月31日(火)から6月4日(土)まで世界貿易センターを中心に3つの会場で開催。出展企業1,602社、5,009小間の規模で開催された。主催は Taipei Computer Association/TCA (台北市電腦商業同業公会) と Taiwan Trade Center/TAITRA (中華民國對外貿易發展協會)、バイヤー登録者数はアメリカ、日本、中国、香港、韓国をはじめ177の国と地域から4万969人。世界中から台湾製品の買い付けを目的に集まるバイヤーを集めて、会期5日間で開催された。

InnoVEX とは Innovation + Venture + Exhibitions の造語。Computex に今年から併設されたもうひとつの展示会である。5月31日(火曜日)から3日間、信義地区の第3ホールで開催された。出展企業は217社、22の国と地域からの出展。世界貿易センター第3ホール全体が InnoVEX 専用会場となり、台湾だけでなく海外からの出展も注目を集めた。

また、第3ホールには会場面積のおよそ4分の1を使ってセミナー会場が設けられ、キーノートスピーチやパネルディスカッション、ピッチコンテストが行われた。センターステージの客席数はおおよそ300席。会場は3日間ともほぼ満席になった。特に、最終日の午後はピッチのファイナルが行われ、一部立ち見が出るほどの盛況だった。プレゼン企業と審査員との白熱したやりとりはなかなか見応えがあった。

ピッチのエントリー企業は102社で、海外から

のエントリーがほぼ半数。書類審査で選ばれたピッチ参加企業は25社。初日と2日目の午後にはこの25社により予選が行われた。決戦大会に駒を進めたのは8社。3日目午後はこの Finalist 8社により最終決戦が行われ、MoBagel (モベアグル/中国語名は「行動貝果」) が Winner となり、賞金3万米ドルを獲得した。



写真1 南港ホールのアップパーフロアの ASUS ブース。EMS ベンダーを除く台湾大手はほぼ勢ぞろいする。出展企業1,602社、5,009小間、会期5日間で開催。



写真2 注目の SmarTEX エリア (Smart Technology Applications & Products) は今年は第1ホールへ移動。IoT 関連の製品やサービスもここに集められた。

■「ピッチ」とは投資家向けに自社技術の優位性を訴えかけるプレゼン

スタートアップ企業が自社の魅力や将来性について、限られた時間を有効に活用し、投資家に直接自社の技術やサービスを売り込むためのプレゼンテーションがピッチである。自社の「強み」とビジネスの優位性を徹底的に訴えかけ、投資家から資金を調達することを目的とする。

スタートアップ企業側は短い時間で簡潔に訴えかける技術が求められる。複数の企業が登壇して資金を獲得するためにプレゼンテーションを競い合うのが「ピッチイベント」（ピッチコンテスト）である。通常のピッチイベントの場合、プレゼンテーションの時間は5分～10分程度。この短い時間内に自社製品が如何に優れているか、また提案するビジネスモデルが如何に有効であるかを自分の言葉で訴えかける。ピッチコンテストでは精査した言葉で、わかりやすく、簡潔に訴えかける技術が求められる。もちろんビジネスに賭ける情熱を伝えることも審査の重要ポイントである。

内容を構成してまとめる力量と実際に聞き手に主張を訴えかける技術、そして情熱の3つが評価の基準となる。当然のことながら訴えかける技術や製品が投資家にとって魅力なものでなければならない。単にプレゼンの技術を競うわけではな



写真3 今年からスタートした InnoVEX。会期3日間で22の国と地域から217社が出展した。写真は第3ホールのセンターステージで開催されたピッチイベントの様子。



写真4 持ち時間6分間で自社製品をPRする。精査した言葉で、わかりやすく、簡潔に訴えかける。限られた時間内で投資家に直接自社の技術やサービスを売り込む。

い。スタートアップ企業が他にはない技術力や製品力をもっているかどうか、ビジネスモデルの獨創性があるかどうかの基本前提だ。

■岐路に立たされている台湾 IT 産業

台湾 IT 産業は曲がり角に来ている。ここで言う「IT 産業」とはハードウェアの製造も含めたパソコン産業全体を指す。台湾ではハードウェアからソフトウェアまで、通信分野から組み込みの領域まで、さらにアプリケーションからコンテンツまでを含めた幅広い領域を「IT 産業」（資訊工業）と呼んでいる。

主力を担うパソコンやタブレット、スマートフォンなどの情報機器端末の業績が低迷している。これまで一定水準の伸び率を維持し、台湾 IT 産業をけん引してきた製品群の生産量がここへきて頭打ちになっている。さらに利益率の低下、モデルごとの開発競争の激化など、抱えている課題も多い。こうした低迷が続く中で何とか活路を見いだそうとしている分野は、台湾でもやはり「IoT 分野」である。

しかし、IoT は「期待」こそ高まっているものの、どのような領域で、どのような活用がされていくのか、どのようなビジネスモデルが作られていくのか、まだまだ未知の分野である。さまざま

な可能性の模索が続いているのが状況である。台湾では Smart home（住宅・家電）、Smart vehicle（車）、Smart Education（教育）、Smart Agri（農業）など、既存の技術やサービスに何でも Smart（智慧）を付けることが流行っている。ビッグデータ、クラウド、ロボティクス、AI といった言葉がもてはやされ、具体的な現場のニーズは何なのか、どこが成長分野なのか、試行錯誤による可能性の模索が続いている。

つまり、キーワードはやはり IoT である。そして IoT 分野における成長の可能性を支えるのはイノベーション（Innovation）であり、さらにイノベーションを起こすためにはベンチャーの力が必要。IoT、イノベーション、ベンチャーといったキーワードがセットで台湾 IT 産業の今後を占う「鍵」となっているとも言えるだろう。

InnoVEX はこうした状況の下で企画されたイベントである。世界の有力 VC（ベンチャーキャピタル）も台湾のイノベーションの力に期待している。これまでにない発想の技術力や製品開発力に「強み」を持つベンチャーの発掘に躍起になっている。台湾の「強み」である製造業などの基盤を生かして、世界に羽ばたくベンチャーを発掘し、育て、ビジネスモデルを構築することができるか



写真5 IoT の新しい領域では、これまでにない自由な発想やユニークな技術力を持つベンチャー企業に期待が集まっている。



写真6 サイドステージでは製品紹介のプレゼンが行われていた。ピッチと違って限られた時間の制限はなく、自社製品を自由に PR する。VC だけでなく大手ベンダーもベンチャーに注目する。

どうか、これは VC だけでなく台湾 IT 産業全体が取り組むべき課題であるとも言えるだろう。

■ MoBagel（モベグル）はクラウド環境を活用した分析プラットフォームを提供

さて、ここでもう少しピッチコンテストの様子を紹介しよう。登壇する企業の持ち時間は6分間。その後、QAの時間が6分間ある。これは審査員との真剣勝負の時間である。審査員側からはビジネスモデルの詰め^{ただ}の甘さについての指摘があったり、「強み」の本質を問い質したりプレゼンテーターに向けた容赦ない指摘や質問が印象的だった。登壇した企業が投資に値する企業かどうか、製品やサービスのビジネスの有効性、プレゼンテーターの熱意など、審査員側も短時間で相手を見極める力が要求される。プレゼンをする側も審査をする側も真剣勝負のやりとりだ。

エントリー102社の中で Winner となった MoBagel（モベグル）は副賞として賞金3万米ドルを獲得した。MoBagel（モベグル）のプレゼンテーマは「Real-Time Predictive Analytics for IOT Devices」、クラウド環境を活用した「分析プラットフォーム」の提案である。

これは家庭内の IoA 機器や家電からデータを

集め、収集したビックデータをリアルタイムで解析する。つまり、家庭内の家電の利用状況を把握することで、故障予測などのタイミングを可視化したり、買い替え時期の把握や新しい製品の購入提案、またこうしたデータは次期モデルの製品開発にも役立てることができる。

MoBagel (モベージェル) は 2010 年設立。現在までに 30 万人以上のユーザーを集め、サービスを展開している。2015 年には、シリコンバレーに新しい本部を設置し、現在すでに世界的なメーカーと契約が進んでいる。日本でも 2015 年にソフト

バンクとの提携がマスコミに報道された。台湾企業とのアライアンス事例として注目を集めた企業である。

InnoVEX2016 ピッチコンテストの受賞者は次の通り。◇「InnoVEX Award」Winner (1 社) : MoBagel ◇「The MOST Special Award」(1 社) : Skywatch ◇「DEAS SHOW Special Award」(3 社) : ① Flexwave、② MoBagel、③ Skywatch ◇「Line Protostar 特別賞」(5 社) : ① Easy Order Network、② IPHOSON TECHNOLOGY、③ KitchBot、④ Konolabs、⑤ WonderVoice Technologies ◇「Acer 特別賞」(3 社) : ① ENHEART (ALCHEMA)、② MoBagel、③ Skywatch

■なぜ、台湾で行われるピッチが注目を集めているか・・・

さまざまな国や地域でベンチャーイベントが開催されるようになってきているが、台湾でピッチが行われる意義とは何か、なぜ台湾のピッチが注目を集めているのか、その理由について考えてみたい。ポイントは3つに点にまとめられる。

第一に、台湾にはこれまで OEM/ODM (Original Equipment Manufacturing /Original Design Manufacturing manufacturer) で培ってきた長年のモノづくりのノウハウがあること。ベンチャー企業のアイデアを具体的な製品にするための絶好の環境がある。これが最も大きな「強み」である。OEM とは委託者のブランドで製品を生産代行すること。ODM とは生産を請け負う側が委託者に製品デザインを提案するビジネスモデルである。台湾企業が培ってきたノウハウがここにある。

台湾はこれまでパソコン、タブレット、スマートフォンなどの IT 端末分野やその周辺機器、ルーターやサーバーなどのネットワーク機器の分野で、量産モデルを世界に供給してきた。ODM で



写真7 MoBagel (モベージェル) はクラウド環境を活用した「分析プラットフォーム」をプレゼン。優勝賞金 30,000 米ドルを手にした。表彰式で壇上に並ぶ MoBagel (モベージェル) チーム。



写真8 プレゼン企業に質問する審査員の鋭い眼差し。書類審査の後、初日と2日目の予算参加企業は 25 社。その中からファイナリストが 8 社選ばれた。

は設計から製品開発、さらに量産までのプロセスや量産化技術至るノウハウを蓄積してきた台湾側からの提案となる。台湾が「世界のパソコン工場」と呼ばれるようになった背景には、こうした台湾企業の経験とノウハウの蓄積がある。

市場のニーズに合わせて短期間にモノを設計し、量産体制をいち早く整え、グローバルな販売網をフルに活用して世界中に製品を供給すること、これが台湾企業の「強み」である。

第二に、原材料の調達からさまざまな部品の供給まで量産体制を支えるサプライチェーンがあること。ハードウェアであればほぼすべての部品が台湾国内で調達できる。コストパフォーマンスを考えた場合は中国企業からの部材の調達や台湾企業が持つネットワークを生かして中国で生産体制を作ることも可能。ハイエンドのモノであれば、日本とのネットワークもある。

こうしたサプライチェーンと生産基盤の厚みが台湾企業の大きな「強み」となっている。パソコンやその周辺機器をはじめ、さまざまな製品で築き上げてきたサプライチェーンは、今後の IoT 分野の製品でも十分に生かすことができる。この点は台湾ならではの「強み」である。

第三のポイントは、世界中に持っている台湾企業の販売ネットワークである。これまで世界中に製品を供給してきた実績と人的なネットワークがあること。これはベンチャー企業のビジネスモデルをグローバルに展開していく可能性を提供するものである。

IT 産業の分野で台湾人が持つネットワークは 1980 年代初めにまで遡る。多くの人材をアメリカから呼び戻し、国策的な産業振興が行われてきた。台湾 IT ベンダーの多くがこの時期に起業している。アメリカの技術系大学を卒業して帰国する人、MBA を取得して台湾で起業する人、台湾の IT 産業の黎明期を支えたのはアメリカに渡った頭脳を呼び戻すことから始まったと言っても過

言ではない。そこには工業研究院などの国の研究機関も大きく関わってきた。

その後、販路拡大とともに台湾人のネットワークは欧米に限らず、中南米、東欧、中国、東南アジアなど世界各地の市場に張り巡らされていく。その中で大きな役割を果たしてきた展示会が Computex である。1990 年代後半からは生産拠点を中国に移し、中国におけるネットワークもよりパイプが太いものとなる。モノを作る、探す、調達する、そして売るという領域で台湾企業は中国でも幅広いネットワークを有する。

ある意味、世界中から 4 万人バイヤーを招いて開催される Computex は、台湾企業がグローバルな市場と直接繋がっていることを証明する展示会と言えるだろう。Computex は製品を供給する側から見ると製品をグローバル市場に売り込む最前線であり、買い付け側から見ると製品トレンドを知り、市場で売れるものを探す最前線である。

世界中が注目する新製品の発表の場であり、品定めのある場でもあり、さらに価格交渉の場でもあり、そして実際にバイヤーが製品を買い付けていくビジネスの最前線でもある。こうしたプラットフォームが台湾にはある。世界と繋がっているネットワークが台湾の「強み」のひとつである。



写真 9 写真は InnoVEX に出展していた TRIPLE(台湾創新快樂製模合中心)のブース。製品の量産ベンダーをマッチングする組織。工業技術研究院/ITRI が運営。

つまり、台湾で開催されるピッチとは、ベンチャーのアイデアをまず形にし、次に量産し、そして世界中に売りさばく……。この3つのポイントを兼ね備えているわけである。そしてこの3つがそのまま台湾の「強み」であり、台湾でピッチが行われることがなぜ意味があることなのか、その答えでもある。

■「メンター」と「アクセラレータ」

ベンチャー育成に眼を向けて経済振興を狙うアジアの国々は多い。どの国でも起業家の育成、ベンチャー支援は今始まったことではない。大学や自治体が取り組むインキュベーション事業は昔から行われていた。これは日本でも例外ではないだろう。しかし、箱モノだけのインキュベーション施設や看板だけの企業家養成プログラムは淘汰されつつある。ここへきて注目されているのは実際の起業の数やビジネスモデルの組み立てにまで漕ぎ着ける企業の数である。ベンチャーや独自の技術やその技術を駆使したサービスに「強み」を持っている。しかし、技術力や開発力だけではビジネスにはならない。事業としてきちんと立ち上がるかどうか問題である。

こうした技術やサービスを事業化し、具体的なビジネスモデルを構築するためにはメンター(mentor)とアクセラレータ(accelerator)の存在が重要なカギとなる。メンターとは「助言者」という意味。本来は企業内で新入社員などを対象に業務の指導や精神的なサポートをするための専門家をメンターという。ベンチャー支援では起業やビジネスモデルの構築に適切なアドバイスを行ったり、メンタル的なサポートを行ったり、さまざまな面でベンチャー支援を担うのがメンターの役割である。

一方、アクセラレータとは「加速」という意味。ベンチャーキャピタルの中で特に起業間もないベンチャーや起業直前のベンチャー企業に投資し、

事業形成を支援する組織またはその担当者をアクセラレータと呼んでいる。ベンチャー投資の段階は「起業前」(シード)、「起業初期」(アーリー)、「成長期」(ミドル)、「拡大期」(レイター)の4つ段階に分類することができる。この中で主にシード期の企業に出資するベンチャーキャピタルはシードアクセラレータと呼ばれている。

つまり、台湾にはこれまでの経験の中から大手のITベンダーを中心に、こうしたメンターやアクセラレータの役割を果たす企業が多数生まれてきている。ベンチャーのアイデアをまず形にし、量産し、そして世界中に売りさばく……。InnoVEXはこの3つの流れを実現するプラットフォームであり、Computexに出展する台湾の大手ベンダー自身も注目するベンチャーイベントなのである。

これまで台湾でも政府や自治体、大学が指導する形でベンチャー支援の動きはあった。しかし、箱モノベンチャー支援であったり、生み出したアイデアを形にするところでなかなか進まないというケースが多かった。(この点は日本でも同じかもしれない)政府や自治体は何をすべきかは議論すべきポイントでもあった。

しかし、もともとベンチャー志向のマインドを持つ経営者が多いのが台湾の特徴。ビックデー



写真10 来年のInnoVEX2017は2017年5月30日(火)から会期3日間。日本からの出展企業も募集している。ピッチイベントへのエントリーも受付中。詳しくはTCA東京事務所まで。

タ、クラウド、IoT、AI (Artificial Intelligence/人工知能)、VR Virtual Reality/仮想現実) といったキーワードが新しい分野の産業を生み出そうとしている中で、ベンチャー企業の動きが一躍注目を集めている。モノ作りのノウハウ、量産技術の経験を持つ台湾の存在はこうした新しい分野でこれまで以上に注目を集めている。

■世界最小クラスの IoT ゲートウェイ

製品レポート(4) NextDrive Inc (聯齊科技)

製品名は「NextDrive Cube」(ネクストドライブ・キューブ)、大きさ 3.5cm ほどの IoT ゲートウェイで簡単な設定で手軽に使うことができる。NextDrive (聯齊科技) は 2015 年に「NextDrive Plug」(ネクストドライブ・プラグ) を Computex 2015 に出展しているが、Cube (キューブ) は Plug (プラグ) の後継モデル。Plug (プラグ) よりさらに小型化され、IoT ゲートウェイとしては世界最小クラス。2016 年モデルは「NextDrive Cube」(ネクストドライブ・キューブ) と名前を変えての出展となった。

この製品の特長は 3 つ。まず、第一に小型で軽量であること。コンパクトながら必要な機能は小さなボディにすべて詰め込まれている。2 つ目の特長は電源モジュールを内蔵している点で、本体をそのままコンセントに差し込むたいへんユニークな設計だ。3 つ目はオプションとして各種のセンサーモジュールが充実していること。温度センサー、湿度センサー、加速度センサー、赤外線センサーなどがラインナップされている。もちろん純正のセキュリティカメラもラインナップ。さらに SIM 対応、Wi-SUN モジュール内蔵など最新モデルはさらに進化し、PM2.5 センサーなど新しいセンサー類もラインナップに追加される。

設定はスマホを使って簡単に行うことができ、誰でもすぐに使いこなすことができる。カメラと人感センサーの組み合わせを使えばセキュリティカ

メラとしてオフィス用としても家庭用としてしても簡単に設定が可能だ。利用者は本体をコンセントに差し込んで NextDrive Connect (専用アプリ) を立ち上げれば、外出先から Wi-Fi 接続で家の中を見たり、ペットの様子を見たり、お年寄りの見守りとしても簡単に活用することができる。

また、USB 接続でハードディスクを接続しておけば、スマートフォン経由でハードディスクから文書を読み出したり (ホームサーバー機能)、ハードディスクを音楽サーバーとして利用することもできる。外出先のスマートフォンからクラウド環境を手軽に利用することができるわけだ。ファイルや写真のバックアップ用として使ったり、パーソナルクラウド環境を構築するデバイスとして利用したり、使い方は工夫次第だ。

LinkNext (聯齊科技) の成立は 2013 年末。5 人で創業した。IC 設計やスマートフォンの研究開発、アプリ開発、クラウド技術などに「強み」を持つ。独特な発想で製品開発を行い、設立間もないながらも開発力とその実績には業界から定評がある。2016 年 10 月には IIJ (株式会社インターネットイニシアティブ) とのアライアンスを正式に発表。日本での法人設立も予定している。IoT 分野での日台アライアンスの動きとして注目されている企業である。

◇ NextDrive Inc (聯齊科技股份有限公司)

台北市汐止区大同路 1 段 126 号

No. 126, Section 1, Datong Rd, Xizhi District, New Taipei City, Taiwan

TEL : + 886-2-2691-7071

FAX : + 886-2-2691-8071

<http://tw.nextdrive.io/tw/>

<http://jp.nextdrive.io/#story>

※製品レポートの(1)～(3)と Computex2016 の詳細なレポートは「交流」8月号を参照。



写真 11 世界最小クラスのIoTゲートウェイ。軽量、コンパクト、使いやすさが特徴。このままコンセントに直接差し込んで使う。リーズナブルな価格も他社を圧倒する。



写真 12 さまざまなセンサーをラインナップする。今後、さらにバリエーションを増やし、IoTの領域のさまざまな用途に対応する。

■ 3D プリンタの普及モデルから産業用のハイエンドモデルまで

製品レポート(5) XYZprinting (三緯國際立體列印科技)

Computex の中で 3D プリンタの出展エリアが年々拡大している。最初はもの珍しさで人を集めた 3D プリンタであったが、すっかり Smart TEX エリア (Smart Technology Applications & Products) の中核を担う製品として定着した。中でも毎年積極的に新製品を送り出してくるのが

XYZprinting である。今年もコストパフォーマンスのよい製品から、産業用の 3D プリンタまで出展製品のラインナップを充実させてきた。

また、今年の XYZprinting ブースではロボットの展示が目をつけた。高さ 50cm ほどの人型ロボットやクモ型のロボットの展示、ドローンの展示、カメラを積んだ潜水艇など、多くの来場者が足を止めてカメラを向けていた。特に人型ロボットやクモ型のロボットは、ブースに設けられたミニステージで音楽に合わせてダンスを披露したり、転んだり起き上がったり、走りまわったり回転したり、多彩な動きで人垣ができるほどの人気だった。

さらに各種のセンサーを装着したドローンや潜水艇も展示されていた。潜水艇は 60cm ほどの大きさで、ブース内に小型のプールが設けられ、水中走行のデモが行われていた。これは単なるホビーとしての利用ではなく、空中や水中などさまざまな空間でのセンシングに対応するロボットの開発が進んでいることを示すもの。検査用途や研究用途などさまざまな使い方が考えられるが、水の中にまでセンシングの動きが広がっている点が興味深い。

他に注目を集めていたのはフード 3D プリンタのデモ。スキャンした形をそのまま 3D プリンタで出力成形してクッキーを作る。そのままオーブンに入れて焼けばできあがり。思いのままの形を作り、それをオーブンで焼いて食べることができるという点がユニークだ。2015 年にも出展されていた製品だが、今年も会場では 3D プリンタを使ったクッキー作りのデモが行われていた。

XYZprinting は新金宝グループ (新金宝集団) の一員。2013 年には 3D プリンタを自社ブランドで展開するために設立された。低価格の 3D プリンタを開発し、世界からも注目を集めている企業である。新金宝グループ (新金宝集団) は世界大手の印刷機メーカーの OEM やプリンタ関連製品や基盤実装、電卓や電子ピアノなどの OEM も行っている。また、グループには金仁宝グループ

(金仁宝集団)があり、世界的に有名な総合EMS企業である。大手パソコンのEMSメーカーである Compal Electronics (仁寶電腦工業) も金仁宝グループ (金仁宝集団) の一員である。

◇ XYZprinting (三緯國際立體列印科技)

新北市深坑區北深路三段 147 號

TEL : + 886-2-2662-2660 ext.28761

<http://us.xyzprinting.com/>

info@xyzprinting.com

<http://jp.xyzprinting.com/>

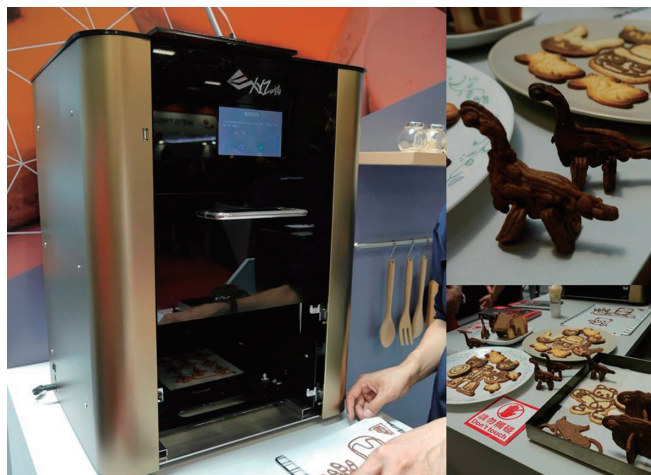


写真 13 スキャンした形をそのまま 3D プリンタで出力成形してクッキーを作る。3D プリンタの新たな可能性 (?) を模索する。

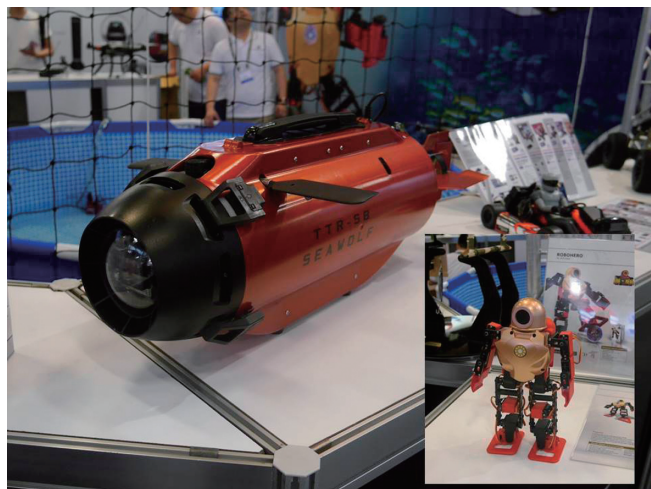


写真 14 空中や水中などさまざまな空間がセンシングの対象になる。ロボットも潜水艇も単なるホビーではない。

■ 赤外線で自動的に対象物を追いかける
Wi-Fi 接続セキュリティカメラロボット

製品レポート (6) Amaryllo International Inc.
(愛瑪麗歐)

製品名は Amaryllo iCamPRO、開発はオランダのアマリロ・インターナショナル社で、製造を台湾で行っている。自動的に対象物を追いかけるセキュリティカメラである。高さ 9 cm × 幅 10cm 約 270g の小型軽量タイプ。Computex2016 の BCAward を受賞した製品である。スマートフォンで遠隔操作ができ、動きや音に反応して自動で静止画または動画の撮影ができる。感知方法はモーション検知と音声検知の二つ。音に反応するという点もこの製品の特長のひとつだ。

しかし、最大の特長はやはり自動追尾モード。赤外線センサーにより対象物を感知すると自動で作動して対象物を追尾する。ホームポジションから 360 度の監視が可能で、対象物の動きが 10 秒間停止すると録画を停止してカメラはホームポジションに戻る。

ホームポジションはスマートフォンアプリで設定。スイッチのオン・オフもスマートフォンで設定できる。カメラの電源をオフにしてもホームポジションは記憶されていて、スマートフォンアプリを使って再設定や時間や撮影エリアを設定することも可能だ。プライベートモードでは、特定の時間に作動させたり作動させない時間を設定したりすることもできる。また特定のエリアだけを撮影するという設定もできる。

デザインもスタイリッシュでインテリアとしてテーブルの上に置いても違和感がない。また、たいへんユニークなのはモデルによっては電球ソケットにそのまま装着して使うこともできる。この点も開発者のこだわりのひとつ。天井に電球ソケットがあれば、そのまま取り付けるだけだ。

さらに、スマートフォンアプリからランシー

バーのように交互に音声のやり取りをすることも可能。たとえば天井に装着したカメラから侵入者に注意喚起を行ったり、テーブルに置いたカメラが映し出した相手と会話を交したり、コミュニケーションツールとして利用することも可能だ。

センサーは前後にあり、それぞれオン・オフを設定することができる。スマホを見ながらカメラを手動操作に動かすことも可能で、自動追尾ボタンを押すと再び自動追尾モードに切り替わる。外出先からでもスマホで画像をリアルタイムで確認することができる。

画像は Amaryllo クラウドサービスに保存することができる。クラウドサービスが充実していることも Amaryllo の特長のひとつだ。赤外線 LED および赤外線カットフィルタの自動制御で夜間でも撮影可能。しかし、残念ながら現行モデルでは屋外対応にはなっていない。野外での使用は不可、またズーム機能もない。更なる進化が期待されるところであるが、今後の開発が楽しみだ。詳細なスペックや価格、日本での取り扱いについては WEB を参照。今後も注目していきたい製品だ。

◇ Amaryllo International Inc. (愛瑪麗歐股份有限公司)



写真 15 製品の紹介をしてくれた担当者。Amaryllo はオランダの会社、彼はドイツ人、流暢な中国語で製品紹介をしてくれた。



写真 16 Computex2016 の BCAward を受賞した注目の製品。スタイリッシュなデザインでインテリアとしても違和感がない。

新竹縣竹北市縣政九路 159 號 4 樓
4F, No. 159, Xianzheng 9th Rd, Zhubei City,
Hsinchu County
<http://www.amaryllo.eu/>
TEL : + 886-3-657-2711

■ブロックを差し込むように装着してモジュールを組み上げる

製品レポート (7) Tibbo Technology Inc. (集博)

ちょうどレゴブロックのような形をしている。基板の上に載っているブロックのひとつひとつがそれぞれの機能を果たすモジュールである。たとえば CPU やメモリーモジュール、電源モジュールなど基本となるパーツの他に、温度センサーや加速度センサーなど必要なモジュールを選んでブロックを差し込むように装着する。モジュールを選択し、自由に配置し、自分だけの基板を自分の手で作り上げる仕組みだ。

この製品の「強み」は次の 3 つの点にまとめられる。第一に、ブロックの種類の豊富さ。さまざまなセンサーモジュールを始め、SIM が入るブロックもある。第二に、クラウドサービスが充実している点である。ブロックの選択から購入ま

で、さらに組み立ての説明から応用ソフト開発まで、クラウドサービスがサポートする。第三に、産業用途として使用できる点である。一見するとホビー用に見えるが、かなり実用的でさまざまな用途で使うことができるスペック。玄人受けする製品である。

基板の上にブロックをどう並べるか、どの機能をまとめて配置し、どの機能を分離して置くか、作る人のセンスが問われる。モジュールをブロック化して組み立てる方式にしたアイデアがユニー

クだ。想像力が掻き立てられるワクワクする製品である。

◇ Tibbo Technology Inc. (集博股份有限公司)
新北市汐止區康寧街 169 巷 31 號 9 樓之 3
9F-3, No.31, Lane 169, Kang-Ning St., Hsi-Chih
Dist., New Taipei City,
<http://tibbo.com/>
TEL + 886-2-2692-5443



写真 17 ブロックのひとつひとつがそれぞれの機能を果たすモジュール。ブロックを並べるようにして必要な機能を基板に組み込む。

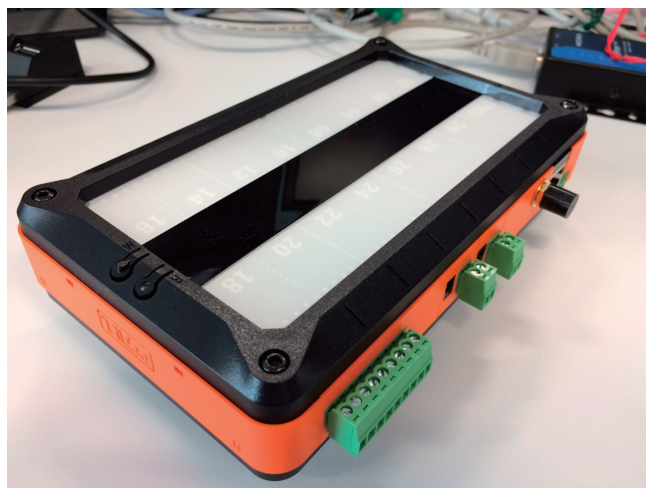


写真 18 モニターにはディスプレイがついている。カバーを取り付けるとセットトップボックスの完成となる。